

アジア研究教育ユニット（特別経費）平成 29 年度教育研究報告書

<p>事業課題名</p>	<p align="center">「ゾミア」地域における少数民族の社会経済動向に関する研究会</p>
<p>代表者名</p>	<p align="center">藤田幸一（東南アジア地域研究研究所・教授）</p>
<p>事業概要 (600 字程度)</p>	<p>William van Schendel が提唱し、James Scott (2009)で有名になった「ゾミア」は中国貴州省・雲南省から東南アジア大陸部北部をへてインド北東諸州やバングラデシュのチッタゴン丘陵部までの山岳地帯で、「国家から逃避してきた」多様な少数民族の居住地域である。近年、中国の「南下政策」が顕著になる中、インドも対抗して勢力を伸ばしつつある。同地域の少数民族の運命はどうなるのか？彼らは事態の動きに対していかに主体的に対応しようとしているのか？中国、ベトナム、ラオス、ミャンマー、インド、バングラデシュなど異なる国家の体制と政策は、彼らにいかに異なる影響を与えているのか？</p> <p>以上のような問題関心の下、日本全国から先端的な研究者や大学院生を招聘し、研究会を通じて知識や経験の蓄積をねらうのが本事業である。将来のより大掛かりな研究プロジェクトの組織化をめざし、ネットワークを構築・発展させることを目標とする。</p>
<p>成果の概要 (800 字程度)</p>	<p>2017 年度は、他の資金源も組み合わせながら、合計 10 回の研究会を実施した（詳細は、別添・本年度分の「ゾミア研究会リスト」を参照）。講師の招へい数はのべ 21 人、うち国内 13 人（京都大学 2 人、名古屋大学 1 人、山形大学 2 人、津田塾大学 2 人、南山大学 1 人、首都大学東京 1 人、神戸山手大学 1 人、秋田大学 1 人、千葉大学 1 人、放送大学 1 人）、海外 8 人（オーストラリア 2 人、ドイツ 2 人、イギリス 1 人、オランダ 1 人、ミャンマー 2 人）であった。</p> <p>研究会の対象地域は、中国・雲南省からミャンマーのカチン、その他少数民族居住地域、インド北東部のアッサムやナガランド、マニプール、インドのジャールカンド、ベトナム山地部、さらにマレーシアのサラワクなど東南アジア海域世界までも含む非常に幅広い「ゾミア」地域であり、毎回多くの参加者を得て、活発な議論が行われた。</p> <p>特に、2018 年 1 月 6 日、1 月 23 日、3 月 23 日には、それぞれイギリスの SOAS、オーストラリアの ANU、オランダのアムステルダム大学から著名な学者を招へいして、それぞれの最新の研究成果を発表していただき、活発な学術交流ができたことは、今年度最大の成果であった。</p> <p>本研究会がねらいとする研究ネットワークは、一連の研究会を通じてさらに広がったといえる。</p> <p>なお、昨年秋には、山形大学の今村真央・准教授を研究代表者とする科研（基盤研究 A）を申請した。</p>

第 25 回ゾミア研究会 (2017 年度)

日 時 : 2017 年 4 月 15 日 (土) 14:00-17:00

会 場 : 京都大学東南アジア地域研究研究所稲盛財団記念館 201 室 (東南亭)

報 告 :

堀江未央 (名古屋大学)

「現代中国における内国移動とエスニシティに関する研究展開」

阿部朋恒 (首都大学東京)

「雲南省南部山間農村出身者の労働移動に関する現状報告」

宮脇千絵 (南山大学)

「雲南省モンの「民族衣装」の流通と漢族との接触」

参加者 : 8 名 (うち外国籍研究者 2 名)

第 26 回ゾミア研究会 (2017 年度)

日 時 : 2017 年 5 月 31 日 (水) 16:30-18:30

会 場 : 京都大学東南アジア地域研究研究所稲盛財団記念館 201 号室 (東南亭)

【PROGRAM】

16:30 開会

16:35-17:35

"To Hell with Buddhism? Reflections on Monasticism, Gender and Modernity among the Tai Lue of Sipsong Panna (P.R. China)" by Dr. Roger Casas Ruiz (Institute for Social Anthropology at the Austrian Academy of Sciences)

17:35-17:50

Commentator: Dr. Tadayoshi Murakami (Osaka University)

17:50-18:30

Open Discussion

【ABSTRACT】

Sipsong Panna, a formerly semi-independent principality in the south of Yunnan Province, is home to the Tai Lue, the largest group of Theravada Buddhists in China. Following the end of Maoism and of direct religious repression, Buddhist practice among the Lue, as well as their cross-border contacts with related groups in Myanmar and northern Thailand, experienced an extraordinary revival. Concurrently, in the last decades Sipsong Panna has integrated into national and regional economic circuits, becoming a key hub in the thriving cross-border trade China maintains with mainland Southeast Asian countries. These economic exchanges are dominated by Han Chinese *guanxi*, relational business networks established and reproduced through culturally specific rituals of feasting and gift-giving (Osburg 2013). In this context, images of manhood and femininity linked to new patterns of consumption and sociality have become dominant in the rural and urban worlds of Sipsong Panna. Importantly, the traditional role of monks and former monks as leading cultural exemplars among the Lue is today threatened by the appearance of alternative paths of social mobility and models of masculinity.

This talk reflects on the contemporary interplay between Buddhist monasticism, new and traditional forms of economic exchange, and gender regimes among the Tai Lue in Sipsong Panna. Offering an ethnographically informed approach to this multicultural and dynamic region, it questions views of ethnic minorities in China as subaltern, highlighting both the precariousness of monastic masculinity and Tai Lue women's potential to develop their own, vernacularized forms of economic engagement in a rapidly transforming border area. Instead of uncritically using Buddhism as an explanatory device (Tannenbaum 2002), the talk looks at gender sub-politics as a fundamental but little explored sphere in which relevant issues of identity and tradition are negotiated.

参加者 : 6 名 (うち外国籍研究者 1 名)

第 27 回ゾミア研究会 (2017 年度)

(共催、京都大学東南アジア地域研究研究所共同研究会「雲南・カチン・アッサム回廊：中国、ミャンマー、インドは内陸で繋がるか」(代表：今村真央・山形大学准教授)

日 時：2017 年 6 月 17 日 (土)

会 場：津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス SA316

プログラム：

(13:30-14:45 「雲南・カチン・アッサム」共同研究プロジェクト第一回会合)

15：00-16：00 今村真央 (山形大学) 「インド北東部のシンポー族：仏教徒低地カチンという例外」

16：00-16：30 藤田幸一 (京都大学) 「インド北東部のシンポー族の生業に関する予備的報告」

16：45-17：45 小島敬裕 (津田塾大学) 「ミャンマー・カチン州プーターオの宗教と社会変容に関する予備報告」

報告要旨

1) 今村報告

「マユードマ」として知られる独自の親族制度とジンポー語という言葉、この二つを「カチン人」の構成要素とみなすと、100 万人近い「カチン人」はミャンマーの北部 (カチン州及びシャン州北部) のみならず、中国南西部からインド北東部にかけて幅広く分布している。この人々は近年、独特の民族衣装や祭事 (マナオ祭) を民族文化の象徴として活発に用い、「越境する少数民族」としての自己表象を行っている。しかし宗教に目を向けると、中国では精霊信仰 (アニミズム)、ミャンマーではキリスト教、そしてインドでは仏教と、各国で大きく異なっている。リーチが『高地ビルマの政治体系』が強調したように、典型的な山岳民族は精霊信仰者かキリスト教徒であるので、上座部仏教の共同体を形成するインド北東部のカチン人 (自称「シンポー族 **Singhpo**」) は異例の存在として特筆に値する。現地での聞き取りによると、インド北東部のカチン人は、1900 年前後にミャンマーからの僧侶の教えてを受けて仏教を受け入れた。その時点で彼らがすでに低地平地民であったことは史料が示している。本報告では、インドに生きる仏教徒カチンに焦点をあて、その歴史をミャンマー側のカチン人と対比することにより、この例外の意味と意義を明らかにしたい。

2) 藤田報告

2017 年 1 月末から 2 月前半、インドのアッサム州およびアルナーチャル・プラデーシュ州で、いくつかのシンポー族の農村で聞き取り調査を実施した。まだほんの予備的調査ではあったが、彼らの社会経済的状況について多くの貴重な知見が得られたので、それを報告したい。その際、同じ民族についての同様の調査を、2016 年

年末には中国・雲南省、それ以前にはミャンマー・カチン州でも実施したので、それらの間の対比も可能な範囲で試みる。以上に基づき、今後の研究課題についても議論し、将来のより本格的な調査研究のための呼び水としたい。

3) 小島報告

本発表では、ミャンマー最北部の宗教と社会変容について、2017年3月に行った調査に基づき、予備的な報告を行う。カチン州プーターオでは歴史的に、カムテイ・シャン族が人口の多数を占めていたとされるが、カチン州南部やザガイン地方域北部、さらにはインドのアルナーチャル・プラデーシュ州への断続的な移動の結果、現在ではむしろ少数派に転じている。彼らは共通して上座仏教を信仰しており、寺院の住職が不在となった際には、他地域から招請するといった関係を維持している。一方でプーターオには、1950年代以降に中国雲南省から移住したリス族をはじめとする多数の非仏教徒も存在する。これに対し、軍政期の1990年代に入ると仏教普及政策が本格化し、ビルマ僧や他地域のシャン僧が派遣されて、非上座仏教徒の宗教実践に影響を与えた。こうしたローカルな実践の動態を、中国・インドとの国境を越える人の移動や、ミャンマー国内の宗教政策との関わりから分析する。

参加者：9名（うち外国籍研究者0名）

第 28 回ゾミア研究会 (2017 年度)

(共催、南アジア地域研究プロジェクト KINDAS グループ 1-A 研究会)

日 時：2017 年 10 月 22 日 (日) 13:30-18:00

会 場：京都大学東南アジア地域研究研究所稲盛財団記念館 201 号室 (東南亭)

プログラム

13:30 開会

13:45-14:35 小磯 学 (神戸山手大学・現代社会学部) 「民族集団アンガミ・ナガ (インド北東部ナガランド州) の祭りとアイデンティティ」

14:35-15:25 遠藤 仁 (人間文化研究機構・総合人間文化研究推進センター／秋田大学大学院国際資源学研究科 (現代中東地域研究拠点)) 「物質文化から見たインド北東部の社会変容」

15:25-16:15 渡邊三津子 (千葉大学大学院・人文科学研究院) 「インド北東部ナガ丘陵における集落分布および土地利用の変遷」

16:30-16:45 コメント 1 木村真希子 (津田塾大学学芸学部)

16:45-17:00 コメント 2 藤田幸一 (京都大学東南アジア地域研究研究所)

17:00-18:00 総合討論

報告要旨：

1) 小磯報告

民族集団ナガはインド北東部のナガランド州とその周辺地域 (全体で四国ほどの面積) に約 200 万人が暮らす。一部では 1960 年代まで首狩りをし合うなど敵対関係にあった約 70 の諸集団から構成され、各々言葉、衣装、装身具、祭りなどが異なり、それぞれが別個の集団としてのアイデンティティを保持している。

歴史的には、19 世紀以降イギリス軍の侵攻が外部世界を意識する端緒となる一方、アメリカの宣教師の活動によって急速にキリスト教への改宗が進んだ (今日では 97% がキリスト教徒、3% が古来の精霊崇拜)。さらに 20 世紀半ば以降にはインドや (当時の) ビルマの中央政府に対する独立運動が活発化し、「他者」に対しての諸集団全体を「ナガ」として統一視する意識が芽生え今日に至っている。

今日、老若男女ともに彼らの多くは熱心なキリスト教徒である。しかし同時に、かつて (そして限定的には今も) 教会が「未開」として否定した伝統衣装や装身具、祭りを頑なに守っている。それが帰属する集団の、そしてナガとしてのアイデンティティを強化する役割を担っているのは当然としても、キリスト教徒としても矛盾なく受け継がれている事例を考察する。

2) 遠藤報告

本発表ではインド北東部に居住する民族集団ナガを対象にキリスト教化や第二次世界大戦、近代化という大きな社会変容を伴う事象に際し、彼らの社会がどのように変化してきたのか、その一端を物質文化、特に装身具から読み解く。

インド北東部の急峻な山岳地帯、いわゆる「僻地」と呼ばれる領域に、州境や印緬間国境に分断され居住しているナガは、これまで大きな社会変容の波に幾度も見舞われている。しかし、平野部に比べ、その生業体系の根本や道具等は急激には変化せず、比較的伝統的な生業や道具を今でも見ることができる。

一方で、装身具に眼を向けるとキリスト教化による価値観の大きな変化や、第二次世界大戦やその後インドからの独立運動による戦火に見舞われたことによる喪失、近代化による価値観の変化など、装身具のもつ意味は大きく変容している。互いに意思疎通が不可能なほど細分化された複数の言語集団で構成された、民族集団ナガは元来アイデンティティを共有する集団ではなかったが、近年では「ナガ」としてまとまる動きが顕著であり、その際にも装身具が象徴の一つとして利用されている。以上を俯瞰し、彼らの社会変容と物質文化の存続を考察する。

3) 渡邊報告

インド北東部とミャンマー北部に跨る峻険な山岳地帯（ナガ丘陵）に居住する民族集団ナガの人々は、山の尾根に集落を築き、焼畑による畑作や陸稲、水稻農耕を営み、狩猟や採集の比重も高い。また、家禽や家畜（ブタ）も飼育しており、半家畜といえるミタンニ牛を森林で放し飼いにしているという点も彼らの特徴となっている。しかしながら、キリスト教化や近代化の波の中で、彼らの生活や文化は大きく変化してきた。本報告では、人口増加の影響を受けて変化するナガの集落分布やその周辺の土地利用に焦点を当てる。

1901年以降の統計データを見ると、ナガランド州の人口は1951年から2001年の間に19倍に増加した。急激な人口増加は土地利用の過密化を招き、斜面崩壊や地滑りが多発して社会問題となっているが、実際、増加する人口はどのように集落に吸収されてきたのだろうか。Mimi、Khonoma村を取り上げ、Corona衛星写真（1960年代）、Pleiades衛星画像（2014年）を比較判読し、集落分布や周辺の土地利用にみられる地域性やその変化を紹介するとともに、それらに影響を及ぼす地形的な要因について考察する。

参加者：19名（うち外国籍研究者0名）

第 29 回ゾミア研究会 (2017 年度)

日 時 : 2017 年 11 月 9 日 (木) 14:30-18:00

会 場 : 京都大学東南アジア地域研究研究所稲盛記念財団記念館 201 号室 (東南亭)

プログラム

14:30 開会

14:40-15:30 Ms. Lahpai Seng Raw (Founder, Metta Development Foundation; 2013 Magsaysay Award Recipient), "The Challenge of Ending Ethnic Conflict in Myanmar: a Kachin Perspective"

15:30-16:20 Mr. Nbyen Dan Hkung Awng (Director, Kachinland School of Arts and Sciences)"Can an Ethnic Minority Group in Myanmar Build Their Own University? The Case of Kachin"

16:30-16:45 Comments by Dr. Masao Imamura (Yamagata Univ.)

16:45-17:00 Reply from presenters

17:00-18:00 General Discussions

参加者 : 11 名 (うち外国籍研究者 5 名)

第 30 回ゾミア研究会 (2017 年度)

日 時 : 2017 年 11 月 10 日 (金) 15:00-17:30

会 場 : 京都大学東南アジア地域研究研究所稲盛財団記念館 201 号室 (東南亭)

プログラム

3:00 開会

3:10-4:00 内堀基光 (放送大学) 「サラワク・イバン人のエスノジェネシス」

4:10-4:30 コメント : 祖田亮次 (大阪市立大学)

4:30-5:30 総合討論

報告要旨 :

ボルネオ島西部のイバン人と呼ばれる人びとのエトノスとしてのまとまりがどのように形成されてきたのか。これについて私がはじめて書いたのは 1984 年であった (「ある焼畑耕作民の歴史—サラワク・イバンの場合」、大林太良編『民族の世界史 6 : 東南アジアの民族と歴史』、山川出版社、416-436)。そこでは、ごく荒削りの仮説として、彼らの祖が現在のサラワク州南部のルパール川流域に 到来する前—時期は特定できないが 17 世紀よりは前—、現在の西カリマンタンを流れるカプアス川の中流域で、周囲の成層化された社会制度 (世襲首長や貴族層の存在) をもつ集団からの逃散者たちが集まってきたのがはじまりではないかと述べた。こうした集団が同地域にいた漁業と交易に関わっていたマレー人 (の祖) との接触を通して、高移動性を軸とする社会的昂進状態を獲得したのではないかとするものである。実証的な証拠はないが、イバンのその後の社会構造 (平等主義)、行動コード (高移住性と拡散志向、首狩)、文化 (物質文化としてインベントリーの少なさと言語表現中心主義)、言語 (類マレー語性) など、こうしたイバンのエスノジェネシスを傍証するものだと論じ、サラワクにおけるその後の狩猟採集民の「イバン化」をも含めて、これを「イバン運動」と表現した。この時に参考にしたのは、E・リーチのカチン高地におけるグムサとグムラオの振り子的な社会構成変動の力学であったが、原稿を書いた後、きわめてよく似た議論を V・キングがしていたのに気づいた。また近年では J・スコットが『支配されない技法』の中でより大きな時間枠でのゾミア地帯社会論を展開しており、島嶼部の例としてイバンにも言及している。ゾミア社会論を読んでだいぶ時間が経つが、ふたたびイバン社会の生成について考えをまとめたく感じ出したところであり、たしようにもその後得た民族誌資料や理屈を整理して、この研究会での発表機会を利用させていただきたく思っている。

参加者 : 14 名 (うち外国籍研究者 1 名)

第31回ゾミア研究会 (2017年度)

(南アジア地域研究プロジェクト KINDAS 合同セミナー)

日時：2017年11月21日(火) 15:00-18:00

会場：京都大学東南アジア地域研究研究所 稲盛財団記念館中会議室

プログラム：

15:00-15:50 Dr. Tam T. Ngo, “Dynamics of Memory and Religious Nationalism in a Sino-Vietnamese Border Town”

15:50-16:40 Professor Peter Van der Veer, “Lost in the Mountains”

17:00-17:20 Comments Julius Bautista (CSEAS Kyoto University)
Masao Imamura (Yamagata University)

17:20-18:00 Discussion

要旨：

Dynamics of Memory and Religious Nationalism in a Sino-Vietnamese Border Town

This paper analyses the dynamics of official and unofficial religious nationalism in the Vietnamese border town Lào Cai. In 1979 Lào Cai was one of many Vietnamese towns that were reduced to rubble during the short but bloody war between Vietnam and China. The normalization in Sino-Vietnamese relation in 1991 allowed a booming border trade that let Lào Cai prosper while the painful memory of this war continued to haunt the town and the daily experiences of its residents, both humans and gods. Since any official remembrance of the war is forbidden by the Vietnamese state, Lào Cai residents have found a religious way to deal with their war memories that skillfully evades state control. By analyzing narratives about the fate of the gods and goddesses that reign in the Father-God Temple and the Mother-Goddess Temple, two religious institutions located right next to the border, this paper shows that it is in the symbolism of the supernatural that one can find memories of the war and of the changing social landscape of Lào Cai and reconstruct its history.

Tam T. Ngo (ngo@mmg.mpg.de) is a research fellow at the Max Planck Institute for the Study of Religious and Ethnic Diversity, Gottingen, Germany. She is the author of the monograph *The New Way: Protestantism and The Hmong in Vietnam* (University of Washington Press, 2016) and co-editor of *Atheist Secularism and Its Discontents: A Comparative Study of Religion and Communism in Eastern Europe and Asia* (Palgrave MacMillan, 2015)

Lost in the Mountains

Peter van der Veer

This paper engages the question of the relation between civilization, political formation, and mountain people in the Southeast Asian mainland massif. The argument I want to present is

that the fragmentary nature of state formation in the area does not allow us to capture it in a model of state versus nonstate actors. Nevertheless, political formations and connections of trade take precedence over civilizational expansion. However, the fragmentary nature of social life in the mountains makes the use of general models difficult.

Prof. Peter van der Veer (b. 1953) is director of the Max Planck Institute for the Study of Religious and Ethnic Diversity in Göttingen. He has taught Anthropology at the Free University of Amsterdam, Utrecht University and the University of Pennsylvania. He received the Hendrik Muller Award for his social science study of religion. He is an elected Fellow of the Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences and a member of several advisory boards, including The Prayer Project of the SSRC in New York. Van der Veer works on religion and nationalism in Asia and Europe. He published a monograph on the comparative study of religion and nationalism in India and China, entitled *The Modern Spirit of Asia. The Spiritual and the Secular in China and India* (Princeton University Press, 2013). Among his other major publications are *Gods on Earth* (LSE Monographs, 1988), *Religious Nationalism* (University of California Press, 1994), and *Imperial Encounters* (Princeton University Press, 2001). He was editor or co-editor of *Orientalism and Post-Colonial Predicament* (University of Pennsylvania Press, 1993), *Nation and Migration* (University of Pennsylvania Press, 1995), *Conversion to Modernities* (Routledge, 1997), *Nation and Religion* (Princeton University Press, 1999), *Media, War, and Terrorism* (Routledge-Curzon, 2003), *Patterns of Middle-Class Consumption in India and China* (Sage 2007). Most recently he edited the *Handbook of Religion and the Asian City. Aspiration and Urbanization in the Twenty-First Century* (University of California Press). Professor van der Veer serves on the Advisory Board of *China in Comparative Perspective*, *Political Theology*, and the *Journal of Religious and Political Practice*. He has just started a new journal: *Cultural Diversity in China*.

参加者：26名（うち外国籍研究者11名）

第32回ゾミア研究会（2017年度）

（共催：京都大学東南アジア地域研究研究所・共同研究会「雲南・カチン・アッサム」（代表：今村真央・山形大学准教授）

日 時：2018年1月6日（土）16～18時

会 場：津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス SA316 教室

プログラム：

16:00～17:00 Dr. Mandy Sadan (SOAS University of London)

“Data Sharing and Open Access: Reflections on the Use and Re-Use of Archival Materials and the Challenges and Opportunities for International Collaborative Data Sharing to Support Learning and Teaching about Minority Communities in Myanmar”

17:00～18:00 Discussion

Abstract: The new digital infrastructure of global academic life has transformed how academics are able to interact with each other, to collaborate and to develop co-authored research. However, when working in areas of Asia that are traditionally considered 'source poor' because of years of conflict that have severely restricted the accumulation of research data by both local communities and international researchers, data sharing to increase the research base is important. However, this immediately produces challenges in relation to translation and the ways in which data can be shared as a common data set. In this presentation, Dr. Sadan will outline some of the ways in which she has tried to develop wider accessibility for her own research data and other resources relating to the Kachin region of Myanmar, both her own and that which has been curated or created by other organisations with which she has worked. This will lead to discussion of how researchers working globally on these issues may be able to bring different data sets together, to enrich not only the base of knowledge in global academia but also the resources accessible to teachers, students and researchers in local communities.

参加者：15名（うち外国籍研究者2名）

第33回ゾミア研究会（2017年度）

（共催：京都大学東南アジア地域研究研究所・共同研究会「雲南・カチン・アッサム」（代表：今村真央・山形大学准教授）

日時：2018年1月23日（火）14:00～18:15

会場：京都大学東南アジア地域研究研究所・稲盛財団記念館 201号室（東南亭）

プログラム：

Part I

14:00-14:50 “Opposing the Rule of Law in Myanmar: How Myanmar’s Courts Make Law and Order” by Dr. Nick Cheesman (ANU)

14:50-15:00 Comments by Rohan D’Souza (Kyoto University)

15:00–15:40 General discussion

Part II

16:00 – 16:50 “How in Myanmar “National Races” Came to Surpass Citizenship and Exclude Rohingya” by Dr. Nick Cheesman

16:50 – 17:00 Comments by Masao Imamura (Yamagata University)

17:00 – 17:10 Comments by Kazuto Ikeda (Osaka University)

17:10 – 18:00 General discussion

Nick Cheesman is Fellow at the Department of Political & Social Change, Australian National University (ANU).

Abstracts:

1. “Opposing the Rule of Law: How Myanmar’s Courts Make Law and Order”
The rule of law is a political ideal today endorsed and promoted worldwide. Or is it? In this presentation I argue that Myanmar is a country in which the rule of law is “lexically present but semantically absent.” Charting ideas and practices from British colonial rule through military dictatorship to the present day, I call upon political and legal theory to explain how and why institutions animated by a concern for law and order oppose the rule of law. Empirically grounded in both Burmese and English sources, including criminal trial records and wide ranging official documents, this presentation offers a study of courts in contemporary Myanmar. It sheds new light on the politics of courts during dark times and sharply illuminates the tension between the demand for law and the imperatives of order.

1. “How in Myanmar “National Races” Came to Surpass Citizenship and Exclude Rohingya”

The idea of “national races” or taingyintha has animated brutal conflict in Myanmar over who or what is “Rohingya.” But because the term is translated from Burmese inconsistently, and because its usage is contingent, its peculiar significance for political speech and action has been lost in work on Myanmar by scholars writing in English. Out of concern that Myanmar’s contemporary politics cannot be understood without reckoning with taingyintha, in this presentation I give national races their due. Adopting a genealogical method, I trace the episodic emergence of taingyintha from colonial times to the present. I examine attempts to order national races taxonomically, and to marry the taxonomy with a juridical project to dominate some people and elide others through a citizenship regime in which membership in a national race has surpassed other conditions for membership in the political community “Myanmar.” Consequently, people who reside in Myanmar but are collectively denied citizenship—like anyone identifying or identified as Rohingya—pursue claims to be taingyintha so as to rejoin the community. Ironically, the surpassing symbolic and juridical power of national races is for people denied civil and political rights at once their problem and their solution.

参加者：23名（うち外国籍研究者9名）

第34回ゾミア研究会（2017年度）

（共催：京都大学東南アジア地域研究研究所・共同研究会「雲南・カチン・アッサム」（代表：今村真央・山形大学准教授）

日時：2018年3月23日（金）14:00～18:00

会場：京都大学東南アジア地域研究研究所・稲盛財団記念館 201号室（東南亭）

プログラム：

14:00-14:20

“War, Gender and Memory: Circulation of Conflicting Narratives about a Naga Female Interpreter and a Japanese Soldier during WWII in the Tangkhul Naga area of Manipur, Northeast India”

by Makiko Kimura (Tsuda Women’s University)

14:20-14:40

"Santali language print media and the Jharkhand imagination."

by Nishaant Choksi (Kyoto University)

14:40-15:00

“Metageography and Asian Studies: Rethinking “Zomia” as a Concept-Metaphor”

by Masao Imamura (Yamagata University)

15:00-15:45 Discussion

16:00-17:00

“Fragmented Sovereignty and Unregulated Flows: The “New Silk Road” and the Bangladesh-China-India-Myanmar Corridor”

by Willem van Schendel (University of Amsterdam)

【Abstract】 In recent years, the idea of the Silk Road has been reconceptualised as an inter-state enterprise led by China – a politically and culturally sanitised venture in which engineering feats and economic planning will lead to a ‘win-win attempt for all.’ In this talk I look at the frailties of such technocratic planning in view of flows and networks that states cannot control, or even clearly perceive. I consider an ‘economic corridor’ that links the overland and maritime Silk Roads – the stretch of land connecting Kunming and Kolkata across Myanmar and Bangladesh. This corridor presents many of the obstacles that the ‘New Silk Road’ is likely to face, notably distrust among states, implementation deficits, fragmented sovereignty and the vigour of unregulated flows across international borders. My presentation suggests that the plan, far from offering a ‘win-win’ solution, will produce unintended and unpredictable outcomes with many losers.

17:00-18:00 Discussion

参加者：33名（うち外国籍研究者12名）